# 日系ペルー人の子どもたちの帰国後の教育・生活状況について

宇都宮大学国際学部　スエヨシ・アナ

一時的な経済的困難に直面した際の家計の緊急避難的な方法としてデカセギが行われてきた。ラテンアメリカから日本へのデカセギ現象が始まってから、デカセギとして来日する人が増えるだけではなく、その子どもを呼び寄せたり、時には、祖父母を含む一家全員を呼び寄せることが増えている。問題の一つとして外国人労働者の子どもへの教育が挙げられる。外国人労働者の子どもの中には、理由は様々だが、例えば日本語能力が十分でなかったり、学校の規則に従うことが難しいことなど、日本の教育制度に適応できない子どもも多い。保護者の中には、日本国内を仕事のために転々としたり、ラテンアメリカと日本のどちらに定住するのか決められない保護者もいる。このことも子どもの教育環境を不安定にしている。以上のことから結局は、片親とともに、または一人でラテンアメリカに帰国する子どもも多い。

今回は、ペルー人労働者の子どもたちの帰国後の教育・生活状況について調査を行った。2008年2月26日から4月5日にかけて調査を行い、日本からペルーに帰国した児童の教科学習、学校生活、日本語能力、家庭状況、進学に焦点をあてた。調査の対象者は5歳から17歳までの子どもがほとんどである。

アンケートは4つの部分に分かれている。第1部では本人について（年齢、出身地、性別、学年、学校名、日本の滞在年数、ペルーの滞在年数、家庭情報等）、第2部では日本の滞在について（日本語能力、日本の家庭生活、日本の学校生活と学習等）、第3部ではペルーの滞在について（スペイン語能力、ペルーの家庭生活、ペルーの学校生活と学習等）、第4部では、これからの個人、家族の計画について（日本に在留している家族、進学計画、帰国の理由、個人の計画、家庭の計画等）聞いている。

リマ州（特にリマ市、カリャオ憲法特別市、ウアラル郡ウアラル市）の日系人学校と日系組織、海岸北部のランバイエケ州チクラヨ市の日系組織で調査を行った。学校は全て私立学校で、小中高8校、幼稚1園、組織が4つであり、小学1年生から大学生まで130人（幼稚園4人、小中学校39人、高等学校73人、大学14人）を対象とした。日系ペルー人の80％以上はリマ州とランバイエケ州に集中しているため、これらの州で調査を行った。

ペルーから日本へデカセギに行く労働者のほと

んどは日系人である。しかし、非日系人で日本へデカセギに来る人もおり、彼らの子どもはペルーに帰国してからも日本語を学習し続ける。非日系人の保護者は、日本語が学習でき、しかも同じデカセギの子どもが多く通う学校に子どもを通わせることが多い。彼らも今回の調査の対象とした。また、日系人であっても日系コミュニティ以外の学校へ通う子どもや、ペルーと日本を行き来する生活をしている子どももいるので、帰国した子どもの正確な数は特定できない。

調査の結果は以下のようであった。

- 調査の対象となった生徒の約半数は日本生まれである。
- 回答者の半分は、ここ3年間のうちに帰国している。
- 「日本の生活が好き」という答えと「ペルーの生活が好き」という答えを比べると、「日本の生活が好き」という答えの割合の方が大きかった。この差はペルーの町での治安が大きな要因となっていると考えられる。
- 「日本の学校が好き」という答えと「ペルーの学校が好き」という答えを比べると、「日本の学校が好き」と答える割合の方が多かった。この差は日本でのスポーツ、部活動の魅力にあると考えられる。
- 教科の好き嫌いに関しては、両国を通して同じ傾向が見られた。しかしペルーでは「社会」が嫌いな生徒が多かった。日本では「歴史」が嫌いな学生が多かった。
- 調査対象者のうち、両親と生活している生徒は28%に過ぎず、片親のみの生徒は45%（43%が母親のみ）、親戚（祖父母）と暮らす生徒が27%いた。
- 日本に家族がいる生徒のうち、60%の生徒の両親が日本にいる。
- 毎日、日本に残っている両親、片親に連絡を取る子供は40%、あまり連絡を取らない子供の割合は10%である。
- 1年以内に日本に滞在する親と会ったことがある子供は30%、10年以上会っていない子供は17%いた。

仮定的な結論としては、帰国した子どもは日本で辛いことがあったとしても、教育、家庭環境に関して、「日本の生活は大好き・好き」と70%は回答し、80%が日本の生活を懐かしいと感じている。

実は、日本滞在時に日本の教育制度や、日本の生活に適応できないだけではなく、自分の家庭に問題があったために日本の生活は辛かったと答えた子どもがいた。ほとんどの家庭では、両親共働きなので、子供は一人ぼっちで過ごす時間が長い。さらに、子どもを不安定な環境にさせ、親は子育てに対する責任感が十分でないと思う。経済的な理由で来日したことは確かであるが、誰のために日本にデカセギに来ようと思ったのか、家族全員が幸せに暮らせるようにとの家庭政策からデカゼギに来ようと思ったのか、という視点を忘れているように思われる。

ペルーの生活にまだ慣れていない子どもも多い。調査を行った学校の教師によると、子どもたちがペルーの学校生活に慣れるまでには少なくとも1年間が必要ということである。しかし、何よりも彼らにとって辛いことは、家族全員が一緒に生活できないということである。家族が離れ離れで生活しなければならない状況が、子どもの教育に大きな影響を与えている。

故に日本での生活も、ペルーでの生活もそれぞれに長所短所があり、どちらがいいというのは言い切れない。

それぞれの子どもにとって快適な生活と、その子にあった教育を吟味することが必要だと考える。

より詳細な調査報告は、『栃木県における外国人児童生徒教育の明日を考える　Vol.Ⅱ』（宇都宮大学平成19・20年度特定重点推進研究成果中間報告書、平成20年12月）に掲載されているので、そちらを御覧いただきたい。